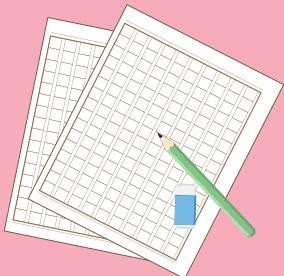


「私の出会った看護師(保健師 助産師)」 エピソード

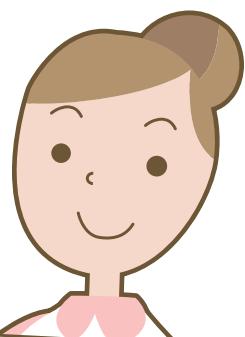
入賞作品集



市民の皆様が体験された
看護師・保健師・助産師との関わりの中で
生まれたエピソード入賞作品集



最優秀賞
「生きる力をありがとう」*



社団法人 静岡県看護協会

静岡県看護協会では、市民の皆様が体験した
看護師・保健師・助産師との関わりの中で生まれた
忘れられないエピソードを一般市民の方を対象に募集しました。
厳正なる審査の結果、最優秀賞1点、優秀賞2点、佳作3点が選ばれました。
ここに入賞作品をご紹介します。



『生きる力をありがとう』

三島市 服部 静子様

私は昨年十月子宮筋腫のため手術しましたが、子宮ガンでした。抗ガン剤治療のため入退院を繰り返し、絶望感と抗ガン剤の副作用の苦しみで、カーテンをしめては、毎晩泣いていました。看護師さんはそんな私を見て、小さなことでも笑顔でほめてくれました。

「テーブルの上のお花がきれいよ。そのスリッパかわいいね。素敵なパジャマね。」髪の毛が抜けてしまった私に「帽子がにあうよ。良い香りがするね。」

私は褒められると本当にそうかしらと小さな希望をもって鏡をみました。鏡には顔色悪く髪の毛のない自分が映っていましたが、それでもその言葉はうれしくて何か希望がわいてきました。

私はこれからどうなるんだろう。自分の将来はあるのだろうか。そんな不安な気持ちをおさえるために、今まで勉強してきた風水・手相・タロット占い・カラーセラピーなどの本を持ち込み、読んでは一人で自分を占っていました。

いよいよ明日退院することが決まった時、一人の看護師さんが、占って欲しいときました。私は分かる範囲で一生懸命説明しました。当たっていたのかいないのかは分かりませんが、喜んでくれて別の看護師さんを連れてきました。そして最後には全員きてくれたのです。みんなすごくあたっているといいました。その時生きる希望をなくしていた私は、私でも何か役にたつことがあるんだと思いました。

今思い返せば、看護師さんたちみんなで、私に生きる希望を持たせるように配慮し、生きる力を与えてくれたのだと思います。

今私はその時のことをもとに、自宅でカウンセリングを開き、人の為に少しでも役立つ生き方をしたいと思っています。

看護師さん・生きる力をありがとう

優秀賞

「たくさんの笑顔をいただいて」

御殿場市 岩田 秀之様

「気をつけて帰ってくださいね。」

帰り際に、いつもやさしい笑顔で声をかけてくれた看護師のEさん。病院と家とは、高速道路を使っても一時間以上かかる道のりです。大雨や雪の日もあった半年間を安全に行き来することができたのは、Eさんの言葉があったからです。

秋も深まってきた昨年十一月、我が子は、交通事故に遭い、意識不明の重体となってしまいました。二週間を集中治療室で過ごしましたが、意識が戻らない中で、一般病棟へ移りました。

不安でいっぱいの中で出会ったのが、担当看護師のEさんでした。Eさんに、体の向き替えやおむつの交換など、世話の仕方のひとつひとつを教えてもらいました。

半年に渡る入院生活、我が子は六年生の春を病院のベッドの上で迎えました。川端に菜の花が咲く頃になると、それまで硬直していた左腕が、ふるえながらも少しずつ動くようになってきました。何かを伝えようとしているようです。すぐにEさんが、B4の紙に『はい』『いいえ』『わからない』と書いたボードを作ってくれました。「頭が痛いのかな。」と聞くと、ふるえる手を『いいえ』の方へ動かしました。「腰が痛いの。」と聞くと、『はい』を指しました。我が子と気持ちのやりとりができるようになった瞬間でした。

今、事故から一年が経ち、我が子はまだ車いすでの生活が続いているが、よく笑い、明るく毎日を過ごしています。それは、入院中、Eさんからたくさんの笑顔と無償の愛情をいただいたからです。

最近では、歌うこともできるようになりました。まだ自力で立つ練習をしている我が子がはじめて歌ったのは、『はじめの一歩』という歌です。「はじめの一歩、あしたに一歩。勇気をもって大きく一歩、歩き出せ。」いつかEさんに会い、聞いてもらいたいです。Eさんのやわらかな笑顔が思い浮かびます。

優秀賞

「隙間に寄り添ってくれた保健師さん」

静岡市 山田 健弘様

「とても大きな困難を伴います。家族だけでは到底無理。親族の力を借りても大変で、色々な支援を受けながら療養することになります。」医師から告げられた病名はALS、筋萎縮性側索硬化症という難病でした。医師の説明が続きます。

「5年ほどで寝たきりになる可能性があります。原因が解明されていないので治療法はありません。」

一瞬頭の中が真っ白になりましたが、側で泣いている妻の姿に家族の未来が見えた気がして、すぐに気持ちが切り替わったのを覚えています。残された時間が限られるのなら、家族のために精一杯生きよう。家族が困らないよう支度しなければ…。そんな想いで胸がいっぱいでした。

退院までの数日は看護師さんのサポートに救われました。おかげで告知直後の不安や悲しみを紓らすことができました。でも、本当の悲しみや焦りは、生活の場に戻ってからこみあげてきます。

どうしようもない不安を誰に打ち明けたらいいのか…。医師との接点は月に一度の外来だけ、告知直後に支えてくれた病棟看護師さんとの接点も無くなりました。外来で紹介された院内の相談室はもっと悲惨で、「今はまだ困っていないでしょ。困ったら来て下さい。」と、私に出来ることはありますと突き放された時は、怒りさえ覚えました。

治療法が無く、しかも数年先は困難が待ち受けている。雨が降ることが分かっていれば、誰だって傘を持って出かけます。雨に降られてから「さあどうしよう」と考える人はいないはず。でも、そこを支える仕組みがないことに愕然としました。

傷つくまでは家族で頑張るしかないのかな。そんなことを思いながら、でも諦めきれずに立寄ったのは保健所でした。告知後に手続きで一度訪れたことを思い出し、あても無いまぶらつと立ち寄ったのですが、そこで保健師さんとの出会いが私たち夫婦にとって大きな力となりました。

不安、焦り、怒り、悲しみ…、時間を惜しまず丁寧に付き合ってくれる存在は、突き放された気持ちでいた中で、大きな心の拠り所でした。

「正直に申し上げて、私はこの病気の経験がありません。分からぬこともありますが、調べたり聞いたりしながら、一緒に考えていきたいと思います。」

孤立していた私たちに、保健師さんのこの言葉は心強く感じました。その後は資料を集めてくれたり、理学療法士を招いて指導してくれたりもしました。「次回までに準備しておきますね」とか、時には「知らせたいことがあるので来れますか」など、継続して関わってくれることも安心につながりました。ここにきてようやく、家族だけで抱え込まなくていいのだと、肩の力が抜けたのを今ではっきり覚えています。

振り返ったとき、一番心細く、誰かの支えが欲しかったのは退院後の生活に戻ったときで、それは病院からは見えにくい部分なのだろうと思います。この隙間でもがいていた時に、しっかり寄り添ってくれた保健師さんの存在を私たち夫婦は忘れません。おかげで私たちには新しい物語のスタートを切ることができました。

佳作

「白衣の母」

静岡市 ペンネーム 恵美ママ様

私は数年前うつ病を患い、静岡県立こころの医療センターに入院したことがあります。

病気らしい病気はしたことがなく、入院は初めて同然の状態、そして常に不安で安定しない精神状態で、私は入院病棟に入りました。精神病院です、普通の内科や外科の患者さんとはやはり違います。看護はきっと難しいのだろうと、素人の私にもうかがい知りました。

しかし私自身やっかいな病気をかかえた身、突然不安になって泣きじゃくったり、夜中に眠れなくて苦しくてホールに出てきて座っていたり、ずいぶん心配と迷惑をかけました。そのたびに看護師さんがかけてくれた言葉は「大丈夫よ、大丈夫」、「大丈夫だからお部屋で寝ましょうね」。その言葉はまるで母に声をかけられたようで、なぜか不安を拭い去ってくれるのでした。

「白衣の天使」などという言葉はもう使い古されて久しいのでしょうか、天使であると同時に看護師さんは私にとってあの病棟の母でした。「白衣の母」と呼んでもよいのでしょうか?夜勤もあり、生活は不規則できついお仕事でしょう、でもそんな風には全く見えないのです。疲れは微塵も見せず、優しい笑顔で接してくださいます。

最後の日、私は手作りのストラップを担当してくださった看護師さんに差し上げて退院しました。後日お手紙をいただき、わざわざ忙しいお時間をぬってお手紙をくださったことにも驚いたのですが、そこにはストラップのお礼と「何にもしてあげられなくてごめんなさい」との言葉が綴られていました。何にもなんてとんでもない!夜眠れなくても看護師さんがいる、「昨日は眠れた?」って聞いてくれる、そして魔法のような「大丈夫」という言葉をくれる。どれだけ助けられ、救われたことか。天使であり、母なのですから。存在が既に尊いのです。

数年後の今、私はまだ同じ病院に通院していますが、入院病棟の看護師さんとお会いすることはできません。でも、私はもう寝たり起きたりで、生きているのか死んでいるのか分からぬような私ではありません。事務員として1日8時間働き、月末月初には残業して、でも休まず会社に通っているのです。この投稿で、あの看護師さんに私は元気にやっていること、あのとき伝え切れなかった感謝の気持ちが伝わればいいと思っています。

佳作

「こんにちは。お元気ですか。」

浜松市 梶原 しおみ様

支えだった母が旅立ってから一年が経とうとしています。大きな喪失感が消えないことに変わりはないものの、母の居ない生活に心が少しづつ追いついて来ています。母は入退院を繰り返し、顔馴染みになった看護師さん達に「看護師さんの顔が見たくて、又、別荘へ来ちゃったー。」などと軽く冗談を言って笑わせたり、点滴の穴だらけの身体を見ては、「傷だらけの人生だわ。」と舌を出して肩をすぼめてみたり、娘の私から見ても、とても可愛い茶目っ氣のあるおばあちゃんでした。

そんな母の他愛のないおしゃべりに大変な激務にも拘らず、嫌な顔ひとつせず付き合ってくれた看護師さん。担当でない日でも母の様子伺いに来てくれた看護師さん。母の大好きな歌手の氷川きよしをわざわざ話題にして母を喜ばせてくれた看護師さん。戦中・戦後の苦しかった時代の同じ話を繰り返す母に、いつも初めて聞くように快く接してくれた訪問入浴でお世話になった看護師さん達。

母の病状が急変し沈む私に「いいお母さんだったんですねえ。お母さん、きっと時間を作ってくれますよ。苦しい時も笑顔を見てくれて、お母さんには逆に私達看護師が教えられることがたくさんありました。」と言って下さった看護師長さん。

三週間後、病院から呼び出しの電話が真夜中に鳴り、駆けつけた時には既に息絶えていた母。その夜は丁度、母の担当看護師さんの勤務で、「母は、最期の瞬間は一人ではなかったんですよね?苦しまずに逝ったんですよね?」という私の涙ながらの矢継ぎ早の問いに大粒の涙をポロポロ零しながら頷いてくれた心優しい新潟出身の看護師さん。私は頷いて欲しかったのです。それを汲み取って下さいました。

どの看護師さんも忘れられません。皆さん、私に助け合いの精神、思いやりの心を今一度思い出させてくれました。人の役に立つ一職域を超えた素晴らしい職業です。どこかでバッタリ出会ったら、手を振り明るく挨拶を交わしたい。「こんにちは。お元気ですか。」と—。

佳作

「ありがとうございました」

磐田市 藤田 ことゑ様

桜の花びらと一緒に、主人は何も出来ない私を一人残して旅立ってしまいました。にくい病気がんでした。

主治医から、二、三日が危いかも、今晚かもと事務的な言葉でつげられました。私はどこをどの様に歩いたのかわからず、三年間お世話になっていた外科外来に足が向いていた。そこで背中にあたたかいものを感じました。それは、私の小さい体を思いきり抱きしめてくれた看護師さんだったのです。何も云わずに長いこと抱きしめてくれていたのです。そして「二人でよくがんばったね。」と云ってくれました。そして「少しでもそばに居てあげて」と、病室まで付き添ってくれました。主人も私も献血登録をしてありますので、今は大学病院で主人は静かにねむっています。

つらくさみしい時もありますが、ありし日の主人とのささやかなくらしの想い出と共に、終生忘れることの出来ない心あたたかい看護師さんです。

言葉少なくとも、人に心寄せる大切さも教えられました。本当にありがとうございました。まわりの人達に助けられ、少しづつ前を向いてくらして居る今日この頃です。